駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 17 号

平成10年3月1日　発行

明治鍼灸大学附属図書館

〒629-0392 京都府船井郡日吉町
TEL. 0771－72－1181㈹

目　次

鍼灸センター長おおいに図書館を語る …… 矢野　忠 … 2

駒の館だより遺聞 …… 河上邦治 … 3

自著を語る …… 丹澤章八 … 4

図書館へちょっと一言 …… 伊藤恒男、石丸圭荘 … 5

私のお薦めの一冊 …… 咲田雅一 … 8

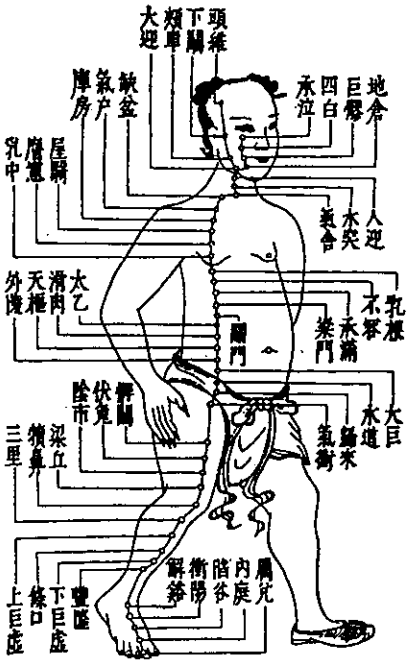
図書館よりのお知らせ …… 附属図書館 … 9

運営委員会記事
…… 附属図書館 … 10

図書館データ、データ
…… 附属図書館 … 11

図書館学蘊蓄
…… 福田代見 … 13

新着東医系図書及び
医学系視聴覚資料一覧
…… 附属図書館 … 14



鍼灸センター長 おおいに図書館を語る

大学図書館はコミュニケーションの場

附属鍼灸センター長　矢　野　　忠

1．大学図書館は大学の「顔」

大学図書館は、大学の「顔」である、とよく云われる。「顔」は、その人の個性を最もよく表現する部位であり、しかも厄介なことに常に人目に曝されている。とすれば、大学図書館は大学の個性を最もよく表現する施設として衆目を集めることになる。

図書館は単に蔵書数や蔵書内容だけではなく、建物デザイン、館内の雰囲気、附属施設、検索サービスなど、様々な要素から成っている。それらの要素が一体となって大学の「顔」としての図書館が存在することになる。

それでは本学の図書館は鍼灸大学としての「顔」をもっているであろうか。

明治鍼灸大学附属図書館と聞けば、東洋医学に関する図書、とりわけ鍼灸医学に関する図書（特に資料性の高い書籍や古書など）は完備しており、国内外の鍼灸医学研究論文はデーターベース化されており、情報検索サービスを行なっていると思う。更には鍼灸医学に関する図書情報をインターネットで発信としているものと思う。唯一の鍼灸大学の図書館だけに、多くのことが要求され、期待される。

残念ながら本学図書館の現状は、上記のことはいずれも整備していない。やむを得ないことだと私は思う。

本学の図書館はまだ若い。本学が誕生してから20年目（短期大学時代も含めて）、ようやく成人式を迎えようとしている。にきび面がようやく治り、少しは大人びいてきたところである。大学図書館は少しずつ大学の個性を表現できる「顔」になりつつあるように思う。

「顔」は、成長とともに変化する。幼い「顔」、若人の「顔」、そして気品と風格の備わった「顔」へと変わっていく。それには年月が必要である。大学自体が星霜を重ね、大学に伝統の気風が育つころ、大学図書館も大学の「顔」として個性ある風格を備えることになるであろう。

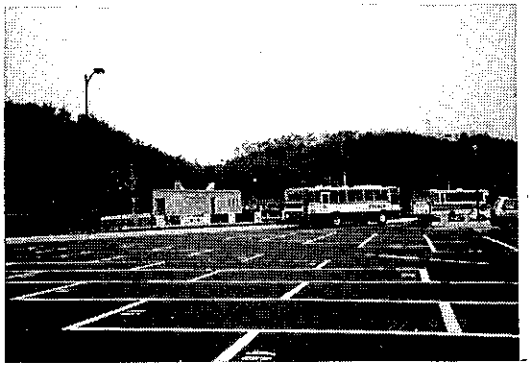
2．鍼灸大学としての図書館の輪郭

鍼灸医学は、伝統医学とも伝承医学とも云われるが、そこには伝統の技とそれを支える大切なもの（思想も含めて）を伝え、発展させるという響きがある。すなわち伝統医学は文化的要素を濃厚にもつ学問であると捉えることができよう。

本学の基本姿勢は、鍼灸医学の科学化にある。何を科学化するのか、極めて難解な命題を背負っているが、その命題を解く鍵となるのが、鍼灸医書であろう。玉石混淆の鍼灸医書の中から玉を捜し当て、それを仮説構成し実験を通して実証していく、この作業こそが鍼灸医学の科学化に求められる基本姿勢ではなかろうか。

その意味においても、鍼灸医書の充実は本学図書館の髄となる。これらの図書は他の図書に比べて利用頻度は少ないかも知れないが、収蔵にあたっては効率を越えた視点が必要であろう。幸いにも本学図書館は、鍼灸医書を積極的に整備しようとしている。この姿勢はこれからも堅持していただきたい。

しかし、鍼灸医書を充実させるには一大学では限界がある。また、古い書籍だけに簡単に購入できるものではない。幸いにも復刻本がシリーズで出版されている。あるいは他施設に収蔵されている鍼灸医書の大部分はマイクロフィルム



完成した鍼灸大学前駅。駅前広場もできた。次はコンビニが欲しいなとは学生諸君の声。
1997年9月3日撮影。

やコピーサービスによって入手できる。現行で可能なあらゆる手段を講じて鍼灸医書の整備に努力して頂きたいと念願する。また、情報検索の一貫として鍼灸医書の所在場所の情報提供もサービスとして展開されることを希望したい。

いつの日か当図書館が鍼灸医書の充実においても我が国有数の大学図書館になることを念願しないではおれない。

3．図書館はコミュニケーションの場

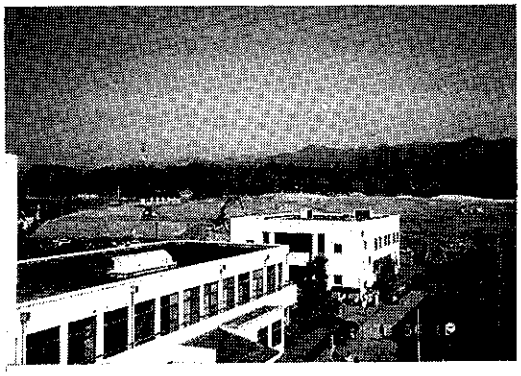
図書館は静寂をもってよしとする、といった常識が根強い。閲覧室での討論は他の人に迷惑をかけることは当然のことである。私が要求したいのは、図書館に附属施設としてコミュニケーションの場を設立して欲しいということである。

名称はセミナー室でも、コミュニケーション室でもよい。要するに図書を持ち込んで、討論できる場を作って欲しいと云うことである。静寂な閲覧室の中で本を読む、読んだ本を抱えて談論風発の議論ができる場、それが図書館に欠かせない要素ではなかろうか。

図書館から持ち出すことが禁じられている図書がある。また、借り出せる図書数にも制限がある。ゼミ等で学生と討論する際に手元に関係図書があると授業は一層活発になるだろうと想像する。スライドやビデオなどの映像設備も備わっていればいうことなしである。

本学の地理的環境からいえば、図書館は学生ラウンジと共にもう一つのコミュニケーションの場として機能することを切に望む。学生の学問への活性化をはかるためにおおいに役立つものと思う。強いては大学の発展にも繋がるものと信ずる。

この願いが遠い夢で終わる事無く、近未来に実現できることを念願して、この稿を終えることにする。



工事中の新グランドを学習棟屋上より撮影。1997年5月1日のこと。この館報が出る頃にはもう完成しているはず。

駒の館だより遺聞

初代学長　河　上　邦　治

本学附属図書館が開館して間もないある日、ということは、昭和５３年５月初め頃のことだった。今から数えてちょうど１９年を経たわけだが、私にとっては昨日のようなことのように思われる。

初代館長の高野教授が学長室を訪れ、この度び図書館報を刊行したいのだが従来の堅苦しい名前はどこの大学も使っていない。なにか大学周辺の土地柄を彷彿させるような教養の高さを現す何かよい名称を考えて下さい。との難問の申し出があった。

昭和５３年４月明治鍼灸短期大学として発足した本学は、開学の当初、実に連日多忙を極めていた。入学式、大学の組織づくり、職員の採用、機構整備、教育訓練、諸法規の整備など、何もかも学内のことは、大小を問わず学長の所へ押し寄せてきた。しかし、当時の教職員は人員の少なさ、事務の複雑さにめげることなく実によく働いて頂いた。仕事に取り組む姿勢の積極性がめだっていた。俗にいう目玉が光っていた。新しい全国唯一の大学を創り出すのだという使命感、一体感が溢れていた。このような環境づくりは自然発生的なもので、人為的に作られたものではない。本学の伝統を大切にしたいものである。

私の仕事の一つに新大学に相応しい学歌作詞

の依頼が理事者側よりあったことである。大学にはそれぞれ建学の精神がある。これをいかに高らかに歌いあげるか。大変な難しい作業であった。作業はいろいろの全国の学歌集の資料蒐集から始め、医療系の資料集めで多くの友人の手助けを受けることとなった。

何とか作詞の原稿はでき上がったものの、もとより自信はない。この道の専門家の校閲を仰ぎたいと念願し、広く国文学者の中から選考をお願いすることとした。幸い日本の大正、昭和を通じて第一人者といわれていた故佐々木信綱博士のご令息である佐々木幸綱先生を友人が紹介してくれた。先生に東京のご自宅でお目にかかる好機を得て私のつたない原稿に筆が入ることとなった。

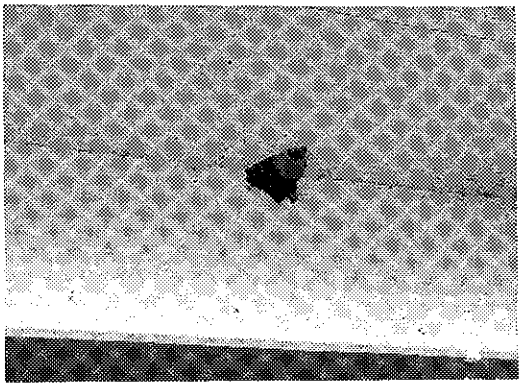
学歌、第2節、は次のとおりとなっている。

駒(こま)川の水いや清く
丹波山脈(たにはやまなみ)仰ぎみて

丹波の国は平安時代以前にも、すなわち万葉の時代より古く風土記をひもといてみても有名で、丹波（たには）の国と呼ばれていた。今日の胡麻の地はおそらく駒（こま）の地と呼ばれていた。コマと言い、タニハと濁音でない言い方は実に万葉の時代の平和で素朴な語感を感ずるものである。

このような発想から推量すると、まさに駒（現在の日吉町胡麻地方）の地に創設された明治鍼灸大学は古い歴史と美しい自然の環境にはぐくまれた日本を代表するよき風土に恵まれていることは疑う余地はない。

明治鍼灸大学附属図書館報の愛称を駒の館（こまのやかた）と名付けたのもこのような由来があったのである。丹波山脈を仰ぎみながら、いちだんと東洋医学の研究に励んで欲しいものである。



鍼灸大に初めてできた燕の巣。学習棟玄関南側。
1997年7月18日撮影。無事に育ってくれるだろうか？
また噂通り幸せを運んでくれるのだろうか？

自著を語る

大学院鍼灸症候学　丹　沢　章　八

鍼灸配穴－その理論と実際

刊々堂新社、平成3年（初版昭和52年）
3，800円

高齢者ケアのための鍼灸治療
－鍼灸の新しい概念を求めて

医道の日本社、平成7年、3，500円

鍼灸最前線－科学化の現在と臨床の展開

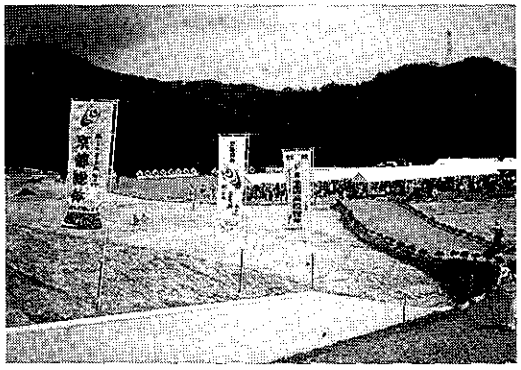
医道の日本社、平成9年、3、000円

私が鍼灸に関して主編（含分担執筆）の役を担ったのは今までに3冊刊行されている。一冊目は「鍼灸配穴」という本である。1976年、その年は日中国交回復間もない、今から思うと毛沢東治世下最後の年であった。WHOの肝煎による初めての日本医師を対象とした中国現代鍼灸学研修の企画が実現し、研修団の一員として上海中医学院で3ケ月半の特訓を受けている最中のことであった。新華社書店の書棚から格好な鍼灸処方集を見つけだし、帰国後早速浅川要氏に翻訳を依頼、私が監修して刊行したのが日本版「新灸配穴」である。この本を手にする度に文化大革命最後の年の上海の市中、病院での臨床実習、はては人民公社の農家の往診先で突然弁証の試験が行なわれたときの光景等々がありありと思い出されて懐かしい。当時は臨床実習試験の際に取穴のガイドラインとして大変役に立ったし、今ではちょっとした配穴のヒントを得るために補習の書として重宝している。現本は初版の出版社とは違い、編・訳者とは関係の無い出版社から刊行されているので、必要な部分はコピーして活用して頂くほうが私として

はすっきりする。勿論版権代などは請求しない。

2冊目は「高齢者ケアーのための鍼灸医療」という本である。第36回（社全日本鍼灸学会学術大会（1986年）長を勤めた折のことであるが、大会テーマを「21世紀を拓く鍼灸医療」と決めた。ところが鍼灸は医療かどうかということが大議論になり、大勢は法律用語の擁護論に傾き、やむなく大会テーマから「医療」という文字を削除せざるを得なくなった経緯がある。しかし私は一貫して鍼灸は医療の範疇ー特に医療を受療者の視点からみた場合ーに堂々と席を占める臨床医学の一つであると確信してきた。その想いを世界鍼灸連合学術大会（1997年京都）の特別講演で披瀝し、鍼灸は現代西欧医療とはジャンルを異にする医療であるから、鍼灸を現代医療の代替医療と格付けするのは誤りであり、そのジャンルに最も適合している鍼灸の医療的活用は高齢者ケアーにあると主張した。その時の講演全文に加筆し、さらに本学の教授・助教授の先生方や筑波技術短大の先生方にそれぞれ専門分野の分担執筆を仰ぎ、編纂させて頂いたのがこの本である。20余年にわたり、医師として鍼灸を愛し、鍼灸の臨床に励んだ者の感慨を込めた書ではある。

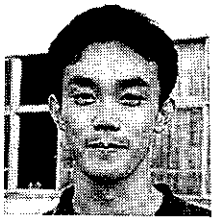
第3冊目は今年（1997年）刊行された「鍼灸最前線」である。第45回（社）全日本鍼灸学術大会（1996年京都大会）長を仰せつかったものの、会場の広さをどのように活用するか頭を痛めていた。学内の意見を集約して考え付いたのが鍼灸医学・医療のアップデイトをパネルとして展示し、教育的な展示を特設コーナーとして設けるという構想である。谷口理事長の全面的なご理解とご援助を得て、この構想は日の目を見た。展示は予想通り大会参加者の注目を浴び多くの学会員から賛辞を添えた高い評価を頂き、期せずして活字出版を要請する声に繋がった。この本はその要望に応え、本学教員を核として、鍼灸医学の今日を担う研究者120名余に及ぶ分担執筆者の絶大なご協力と、細緻に亙り編集の実務をこなされた尾崎教授の労とに支えられて完成した書である。この書は書名に見るとおり、基礎から臨床に亙る今日的知見・知識の集大成であり、鍼灸医学に関する今世紀の総括と、新世紀につなぐ展望を示している。学校協会が教科副読本として推薦されたこともうなずける。学びの舎にいる者に限らず、現代に生きる鍼灸師にとって必見・必蔵の書ではなかろうか。ある新進気鋭の鍼灸師がこの書を評して「現代の黄帝内経」と私に言った。やや大仰ではあるがこの評を分担執筆諸氏にそのご苦労を報いる賛辞として捧げたい。



1997年に京都で開催された高校総体。日吉町ではアーチェリーの試合が行なわれた。完成真近の本学グランドで調整と練習に励む選手達。　8月4日撮影。

図書館へちょっと一言

図書館にて



奈良、藤本漢祥院勤務
6期卒業生　伊藤恒雄

“キンコンカンコン、
キンカンコーン”

私が図書館に入るちょうどその時、チャイムが鳴った。

図書館に入ると左右に物置場とロッカーが横たわっている。

入り口正面、受付けの奥に見慣れた姿があった。「よお、元気か。」図書館長である。「いいところに来たな。」先生の笑顔にいつもと違う何かを感じた。ニコニコしながら先生は私に3冊の「駒の館だより」（この館報ですよ）を渡してく

れた。

すぐ読んでみる。内容はなかなか面白く、ためになりそうである。特にカット写真は懐かしさや胸に迫るものを感じさせてくれた。

「俺が考えたんだ。」先生が少し、いや結構得意げに言った。先生が少し間をみて、私が予想していたことを切り出してきた。「今度の館報に君の文章を載せてくれないか。内容は好きなものでいいから。」

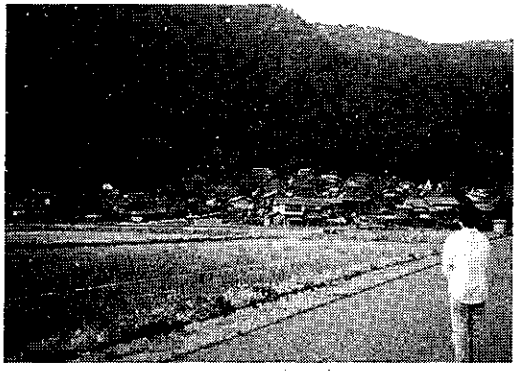
少し困った。急いで“図書館へちょっと一言”を読んでみる。みんなキッチリとしたことを書いていらっしゃる。蔵書の量と質、外部からの貸出し制度について、情報提供、図書館の感想etc.。

私が書く内容は少ない。目立ちたがり屋のもう一人の私が思う。そうだ、誰も書かなかったものを書いてみよう。みんなに失笑をかうかもしれないが、こんなことを書く奴がぐらい居てもいいだろう・・・。「一度、書いてみます」そう言って日吉の丘を後にした。

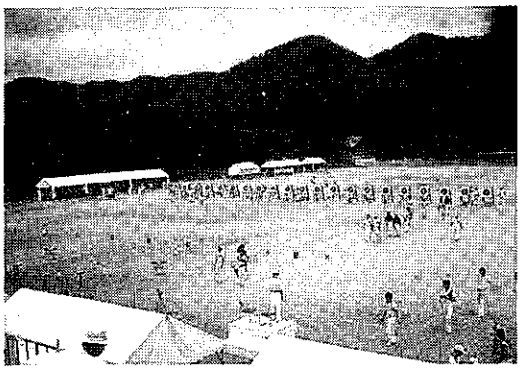
『僕は今、図書館にいる。

僕のことを少し話そう。明治鍼灸大学を卒業して早6年くらい。現在ある鍼灸の先生の所で内弟子をさせてもらっている。今日は調べ物をするために図書館へ来た。内容は心臓疾患について。現在1～2ケ月に一度、図書館へ来館させてもらうが、来るたびにここは変化していると感じる。

入り口に荷物置場ができた。閲覧できる図書が飛躍的に増加した。検索用コンピュータが設置された。図書館奥ではビデオ鑑賞も可能である。昔の図書館を知る僕にとって、驚きの連続



美山町南地区の茅葺の里。重要伝統的建造物群保存地区となっている。緑濃い5月。



胡麻総合グランドで開催された京都高校総体アーチェリーの試合。　8月4日撮影。

である。先生の図書館に対する想いが熱いくらいに伝わってくる。

ちょっと時計を見る。調べ物を探してもう2時間が過ぎていた。疲れてソファーで一休み。周りを見渡すと色々な雑誌が行儀よく並んでいる。僕が学生の時に比べると雑誌の数も多くなったな。

ふっと、眼を窓の外に向けてみた。学習棟の入り口を斜めから見て、向こうに芝生が見える。僕の学生時代になかったブロンズ像も座っている。そこへ学習棟へ向かって走る人ひとり。「あれ、」思わず声が出た。学生時代の友人ではないか。何故、彼がいるんだ。いるはずがない。しかし、あいつも図書館に来るのかな。そんなことはないか。彼も僕も学生の頃、あまり図書館を利用しなかった。それでも図書館での想出は数えきれない。友人と一緒にレポートを書いたときのやり取り。周りの迷惑を考えず、大声で話をしたこと。専門書なんか見ずに雑誌ばかり見ていたこと。蔵書がすくないことや貸出し方法についての図書館の悪口ばかり。彼女と一緒に本を見たりもした。あの女性（ひと）は今何をしているだろう。元気だろうか・・・・。何処だろう。遠くからキャンデイーズの”微笑み返し”が聴こえた気がした。

「先輩。」柔らかい声が僕に向けられた。

「何してるんですか。ボーとして。」

「ごめん。ごめん。癖なんだ。」

「謝らなくてもいいですよ。調べ物ですか。手伝いますよ。」

「ありがとう。」

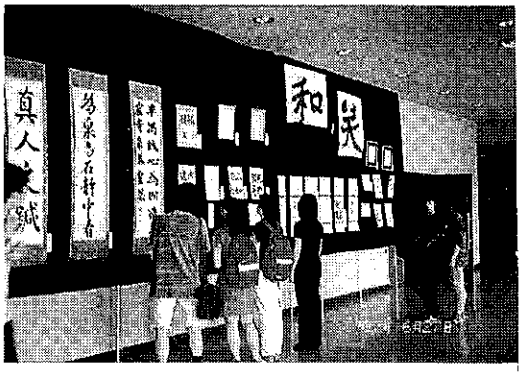
さあ、もう一度、図書の峰々に登るか。

現在の図書館はまだまだ多くの改善点を含んでいる。しかし、私達の時代のそれとは大きく変化している。少しずつだが確実に良い流れを創り、それに向かって流れている。これは先生方の図書館に対する熱い想いと絶え間ない行動力の賜であると察する。この「よりよく」変えていこうとする想い・流れを私は私全体で感じ、魂の肥やしとしていきたい。

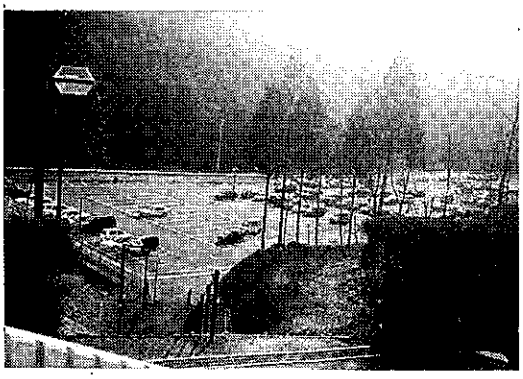
学術誌の活用を！
教官の立場から学生諸君へ

第三東洋医学臨床教室
石丸圭荘

鍼灸大学附属図書館の特殊性から鍼灸の学術誌は勿論のこと、国内外の医学専門学会誌を受付右側の書架で閲覧することができる。これらは各学会の学術誌として発刊され最先端の治療や理論など学会発表を聴講しなくとも知ることができる貴重な学術誌（情報源）である。これらの学術誌は個人購読できるものもあるが、ほとんどが学会に入会してはじめて手にすることができる。私の経験では、学会に入会するためには、研究業績の審査や入会する学会組織の理事推薦を介してはじめて入会が認められるケースもあった。さらに、数万円の入会金および年会費などを要する。この点から、学生諸君が個人で多くの学術誌を揃えることは容易ではない。しかし、附属図書館ではこれらの手間を全く必要とせず、専門分野の最先端の情報（学術誌）を入手することができる。図書は過去に確立された事項については、懇切丁寧な解説を与えてくれるが、最先端の治療技術や理論などは対応することができない。鍼灸を含む医学はまだまだ進歩の途上にある。図書だけでなく学術誌にも目を向けて欲しい。私も学生時代を振り返ると、レポートの作製などに学術誌を活用していたが、多彩な学術誌（最先端の情報）を前にして十分に活用できていなかったように思う。最近、よく学生諸君から物理療法学の和訳レポートで経皮的電気神経刺激（Transcutaneous Electrical Nervous Stimulation : TENS ）についての英論文を紹介して欲しいと頼まれる。時には、和訳のある英論文はないかと聞かれることもある。しかし、都合よく和訳の付いている英文学術誌はない。英文献検索には国際医学学術誌の約三千九百誌を検索することができるMEDLINE（メドライン）が活用できれば良いが、現在のところ附属図書館にはこのシステムが設置されていない。このシステムはインターネットやCD-ROMを活用し、キーワードで英文献を検索することができる。しかし、検索で学術誌のバックナンバーを引き出しても、本学附属図書館にない英文献であればすぐに目を通すことはできない。そこで、レポート作製における文献の活用法は、レポートのテーマを考慮し、TENS であれば、鎮痛を目的に活用される治療法であることから、国際学術誌では『Clinical Journal of Pain』や『PAIN』などの痛みに関する学術誌でかつ附属図書館の書架に常設されている学術誌を活用することを学生諸君にお薦めしたい。



恒例の書道部の七夕書道展。もう少し見にきてくれないものかねえ。　1997年6月27日撮影。



鍼灸大学前駅完成に伴って新設された大学東側の駐車場。長い坂道がある。この坂のおかげで職員の体力増強が期待できそうである。1997年2月10日撮影。

【書評】 私のおすすめの一冊

柳田邦男：「死の医学」への序章 新潮社、1，300円
：「死の医学」への日記 新潮社、1，700円

外科学教室 咲 田 雅 一

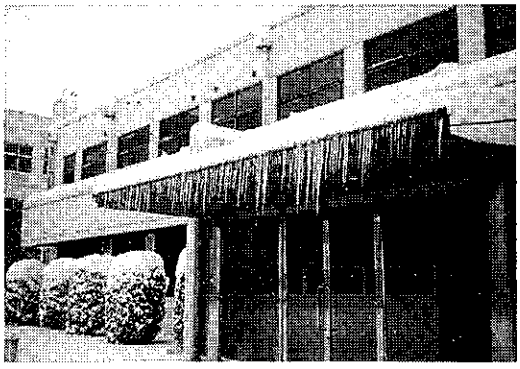
図書館長より、「駒の館」に最近読んだ本の書評を書いて下さいとの依頼を受けた。元来それほど読書家でもないので困惑したが、丁度つい先日、読売新聞大阪発刊４５周年ということで、「いのち見つめて」と題するフォーラムがあった。主に終末期医療についての講演や報告、パネルデスカッションであったが、その中で特に感銘を受けたのが、柳田邦男氏の講演で、帰りに早速、彼の著書を数冊買って帰った。その中に『「死の医学」への序章』、『「死の医学」への日記』というのがあり、これに対する書評を書くことにした。

彼は元来、ＮＨＫの社会部の遊軍記者で、災害事故、科学、航空機問題などの報道に携わって、事故や災害の現場で数々の死を目撃して衝撃を受けたことから、生と死の問題にこだわるようになったと書いている。「死の医学」に関するこの２冊の著書は、癌で倒れた何人かの人々を詳細に取材し、その生き様あるいは死に様を患者の背景と心の内面を中心に語りながら、現代医学におけるターミナルケアーの問題や告知の問題等々への提言と示唆を行なっている。

この１０年余りの間に、主に終末期医療という面からみると、日本人の死についての対応も変化してきており、医療全般における人間性の復権が著しく進展しているが、著者は、現代は「尊厳ある死を自分で創らないと人生を完成できない時代」、あるいは「自分の死を創る時代」と呼んでいる。

これらの本に紹介された事例の中には、命の刻む音を聴きながら自らの死を見つめ記録して逝った精神科医、最後の死力を振り絞って石仏の写真集を完成させた女流写真家、肝臓癌と闘いながら「ニュースの読み方」という一書を書き上げた社会部記者、等々、、、。彼らは自分の病の告知を受け、自分の先のないことを自覚しつつ、その中で「死んだように」ではなく「生きて」死を迎えようとしている。著者は、このように死を前面にしてなお積極的な生き方を選択しようとしている人々が多くなっている背景として、一つには、働き盛りの年齢層に癌が増えていること、第二に、医学の進歩によって、進行癌であっても、日常生活に戻れる状態に回復させることが可能になり、生きられる期間も長くなったという事情を指摘している。そして、その結果、医療者側もこのような患者への対応の変更を求められ、ただ治療していればよいと言うのではなく、闘病者の生き方の選択に対し、病気の特性や予後の見通しについて専門家として、助言者、支援者の役割を果たすことが求められている。また、たとえ癌を治すことが出来なくても、症状の緩和ケアーが病む者の時間にとって決定的な重要な意味をもつ事、そして、このような緩和ケアーは、緩和ケアー病棟やホスピスだけでなく、一般病棟あるいは在宅でも十分可能であることが示唆されている。

小生自身、今までに多くの癌患者の最後に立ち会ってきた一外科医として、これらの本に書かれたターミナルケアーに対する提言はいちいち胸にこたえるものがあった。現在の大学病院では治癒する見込みのない末期の患者に対して、



ウー寒。本館東側玄関に垂れ下ったつらら。ここは寒冷の地なのだ。 1997年２月22日撮影。

どう考えてもやりすぎの医療が行なわれていると言われている。患者の亡くなるその日まで、かなり副作用の強い抗癌剤が投与され、患者は癌そのものから来る苦しみに加え副作用による苦しみも味わっている。治療や延命に関しては熱心な医師は多いが、苦痛の緩和に関心を寄せる医師は少なく、また、癌をもっている患者の心に対するケアーも足りないとも指摘されている。癌の末期で、これから逝こうとしている患者に馬乗りになって、最後の最後まで蘇生術を施そうとする若い医師、家族は病室に追い出されて、呼び入れられたときには患者は既に逝っており、死に際に、家族や愛する者が手をとって見送ってやれないようなそんな医療が本当の医療であろうか、と著者は問うている。

また、終末期医療を考える前の一つの大きな課題として病名告知の問題があるが、現在日本では、告知が行なわれる方向に進んでいるが、我々の附属病院も含め、未だ、原則として告知しない方針でいる病院も多くある。その理由は、告知後の患者の支援体制が十分でないということである。しかし、自分の死を創る時代と認識されている現在、あるいは、インフォームドコンセントの重要性が強く言われ、患者の医療における自己決定権が尊重される時代において、一律に告知をしない方針というのも問題で、告知後に生じる患者の悩みにきめ細かに対応し、精神的ケアーと支援体制が出来るような体制の構築への努力が急務であろうと思う。

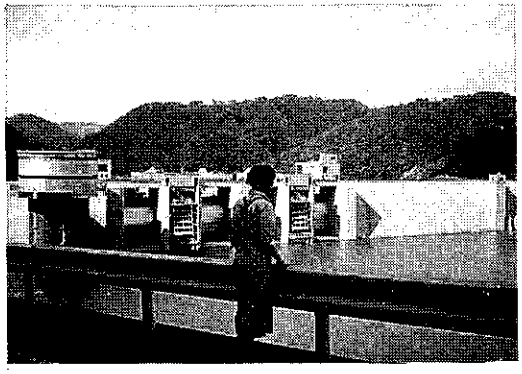
図書館よりのお知らせ

1．CD-ROM 専用 PC プレイヤーが入りました。場所はビデオコーナーです。ご利用下さい。

2．書架を増設しました。その煽りで閉架内にあった職員用の閲覧スペースは手狭になりました。何分図書を収納する空間が不足しております。ご了承下さい。

3．既に掲示でご存じのことと思いますが、閲覧室への個人の図書・雑誌等の持ち込みは禁止致します（図書館利用規定第２０条第５号)。持ち込めるのは筆記用具等閲覧に必要なものだけです。どうしても必要という場合は受け付けまで申し出て下さい。非常に不便になります。しかしお知らせしておりますように２００冊、１００万円という図書が開架から紛失してしまうという状況では止むを得ないと了承して頂く他ありません。なおこの措置は無断帯出防止装置が設置され次第解除する予定です。

８月４日に開催されたオープンキャンパスにて受験生の相談に応じる在学生の諸君。変なことは教えてないでしょうな。



完成した日吉ダムの偉容。関西では１、２を争うという。去年の写真にはまだ水が無かった。今年は完成を記念して日吉ダムハーフマラソンも開催されるという。　1997年９月19日撮影。

図書館運営委員会記事

附　属　図　書　館

第１回平成９年５月２９日

１．報告事項

（１）蔵書の現況

総数４４、１６６冊、昨年より１８１３冊の増加。学術雑誌１９５（９７）、一般雑誌２０（１）計２１５（９８）種となった。（　）内は外国雑誌。視聴覚資料は７０１で昨年度より６１の増加があった。

（２）蔵書点検の結果

蔵書点検の自動化が完成したので全開架図書１０、９００冊について点検したところ２０１冊、１、１０１、９８１円が紛失していることが判明した。

（３）その他

私立大学図書館秋季京都地区協議会を９月２６日（金）１３時より新都ホテルで開催する。

２．協議事項

（１）無断帯出の防止について

大量の図書の紛失が発生したことで新たな無断帯出防止策が必要となった。将来的にはブックデイテクションを導入する必要があることを確認。当面は夏にもう一度点検を行いその結果をみて個人の図書の持ち込みの禁止等の措置をとることにした。この件は掲示をして広く警告する。

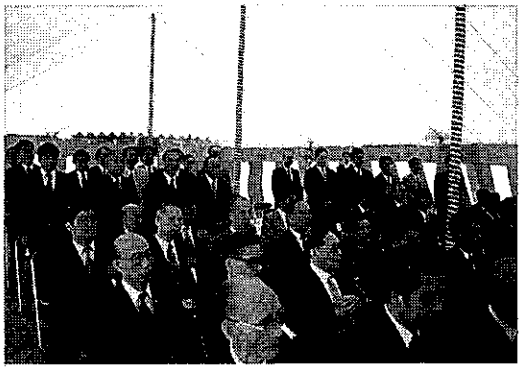
（２）その他

①Current Contents,Life Scienceは来年よりデイスクのみを購入する。

②閉架書庫への入室は、４年生についてはゼミの教官よりの連絡をもらえば許可する。その他の希望者については図書館員が立ち合う。

③事務職員にたいしても１３条を適用することが認められた。

④一般雑誌の一夜貸しの上限を３冊とっすることにした。



1997年８月31日にとりおこなわれた体育館の起工式。来年の10月には完成の予定。待遠しいことだ。

第２回平成９年１１月７日

１．報告事項

（１）図書館報の発行について

従来通りの方針で発行する。

（２）紛失図書の除籍について

弁償の済んだ５冊を年度末に除籍する。

（３）紛失図書の追跡調査結果について

５冊が発見され不明図書は１９６冊となった。

（４）その他

私立大学図書館協会秋季京都地区協議会を９月２６日新都ホテルにて本学が当番校として開催した。２７大学４３名の出席があり、無事終了した。

２．協議事項

（１）無断帯出防止策について

図書館利用規定第２０条第５号（閲覧に必要なもの以外は持ち込み禁止）を適用する。ただしどうしても必要な図書、雑誌については持ち込みについて受け付けにて許可を得るようにする。図書無断帯出防止装置設置までの措置とする。

（２）その他

開館時間を現行の９時３０分より９時とすることが了承された。

鍼灸大駅を降り立ち大学に向かう学生の群れ。やっとこの風景にも慣れた。　1997年９月22日撮影。

図書館データ、データ

附 属 図 書 館

今回は図書の館外貸出しから見た図書館の利用状況を紹介しよう。なにも館外貸出しだけが図書館の利用形態ではないが残念ながら当館では入館者の数の測定を行なっていないのでそれしかチェックのしようがない。表１をご覧頂こう。学生諸君への図書貸出証の発行数である。これがなければ館外貸出しはできない。年度の始めに全員に渡すわけではなく希望者に発行するようになっている。従ってこの数は積極的に図書館を利用したいという人数を現しているといってよかろう。平成８年度から方式が変わって一度発行するとそのカードは卒業しても有効になったがそれまでは毎年新たに発行する方式だったので上記の人数をほぼ正確にあらわしているといってよかろう。他とは研修生、研究生等を表わしている。また短大時代では専攻生である。大学となったのはＳ５８年なので４年生が現われるのはＳ６１年からである。大学院はＨ３年から、卒研は病院のできたＳ６２年からだ。Ｈ７年より学部生以外は貸出証は不要になっている。年度によってかなり差があるが最近では３００人前後の人が申し込んでいる。１、２、３年生では定員の半数程度しか希望していない。あまり切迫感がないのだろうか？４年生でも全員というわけではないが多少多い。レポート等の必要のためだろうか。少し寂しい感じがしないでもない。４年間全然図書館を利用しなかった猛者もいると聞く。学習以外にも多いに利用して欲しいものだ。なお平成８年度より貸出しは新方式に移行したのでこのような集計は無意味となったのでこれで終わりとなる。表２は年間の総貸出し冊数と人数を示す。これはデータが完全に揃い始めたのがＨ５年からなので少し物足りないがおおまかな様子はみてとれる。年度によってかなり差はあるが学生の延べ利用人数は１４００から２５００人、冊数は１７００から３３００冊といったところか。職員の方はほぼ一定していて２００人が５００冊を借り出している。コンピューターでの貸出し方式に移行し、貸出し手続が簡素化された平成８年度の貸出し冊数と人数はそれまでに比べ大幅に増加した。図書館としては今後ともこのような旺盛な図書の要望に対して奮励努力を重ねていくつもりである。

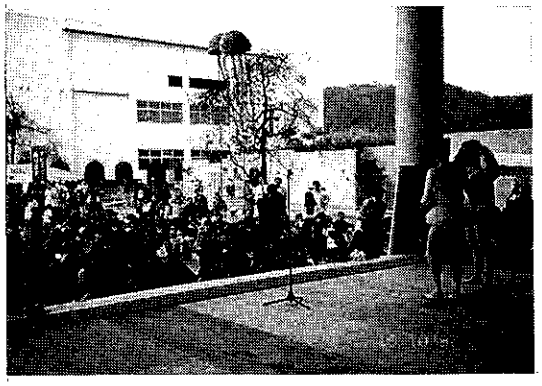
表１　貸出証発行枚数の推移

年度	１年	２年	３年	４年	院生	研究	他	計
Ｓ５４	１０３	８９						
５５	１０８	９９	７６					
５６	１０２	７９	８６					
５７	６０	７１	６４					
５８	８１	５４	６９				１５	２１９
５９	９５	７１	６０				１５	２４１
６０	１０２	７５	７４				１４	２６５
６１	８５	７９	６９	６１			１	２９５
６２	５６	７１	８３	７８		１１	６	３０５
６３	７６	４５	７７	７６		１６	９	２９９
Ｈ　１	７５	８５	４９	７４		１４	８	３０５
２	６９	６９	５０	６３		１７	９	２７７
３	５８	８０	６０	６８	８	１８	１５	３０７
４	６１	６２	５１	７２	１２	１７	３	２７８
５	６６	５６	４７	７４	９	２１	２	２７１
６	８１	７０	３８	５４	９	１７	２	２７１
７	９１	８８	８２	９７				

表2　貸出し冊数および人数

年度	学　部	院生等	職　員	計
S56	2899	421	155	3475
				2565
58	1743	145		1888
				1314
59	1838	139		1977
	1417			
61	2576		560	3136
	1792		287	2079
62	2837	589	591	4017
	2133		306	2439
H 1	3315	323	526	4164
	2501		244	2745
2	2898	426	548	387
	2201		225	2438
3	3359	467	555	4381
	2031		265	2291
4	2455	588	588	3601
				2538
5	1917	628	520	3065
	1464	364	252	2080
6	2189	577	428	3194
	1671	283	203	2157
7	2906	385	271	3562
	2116	198	138	2452
8	3175	856	920	4951
	2218	347	239	2804

9月26日に新都ホテル陽明殿で開催された私立大学図書館協会京都地区協議会。今年は本学が当番校となった。



たには祭り、ミスターレディコンテストに見入る観客。　1997年10月18日撮影。

【図書館学うんちく】

ISBN（国際標準図書番号）について

附属図書館　福　田　代　見

図書館で手に取る図書の多くは裏表紙に ISBN と書かれた後に10桁（ハイフン除く）の数字が印刷されており、それと気づかずに目にされていることと思います。

これが International Standard Book Numbering 略してISBN（アイエスビーエヌ）＝国際標準図書番号です。これはいわば、「図書の戸籍番号」ともいうべきもので、ハイフンで区切られた数字には、それぞれに意味があります。

ISBNは、1967年頃からイギリス国内で使用され、改良されて世界に普及しています。

現在、国際 ISBN 機関（International ISBN Agency）という組織がベルリンにあり、加盟国に国別記号を付与、各国の ISBN 機関の勧告、指導を行っています。

日本では、1979年に加盟し、日本図書管理センター（Japan ISBN Agency）が出版社（者）コード等を割り当てて、各出版社が自社発行の書籍に書名記号を割当てます。

1981年の新刊からコード表示を開始していますので、それ以前の出版物には当然ついていません。

このような日本図書コードのついた出版物は、法定納本制により原則として出版社（者）から国立国会図書館に納本されています。また図書館システムでの J-BISC（データーベース検索システム）などからの図書データーの遡及入力には、ISBN が重要になります。

それでは、記号の意味をご説明します。

例

ISBN 4－8204－9002－8

A　B　C　D

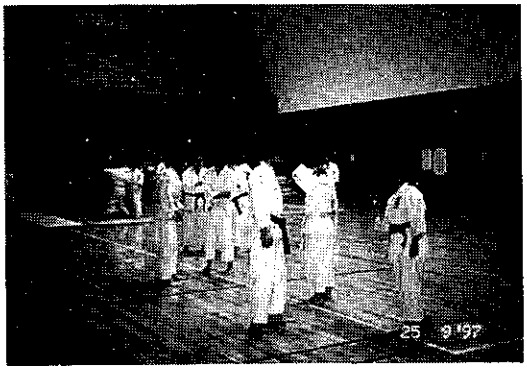
A…国名記号。4は日本をあらわします。

B…出版者記号（2～7桁）。出版点数が多いほど、桁数は少なくなります。

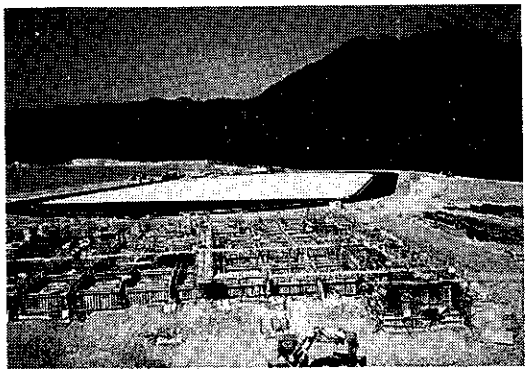
C…書名記号（1～6桁）。出版社（者）が自社の出版物に書名記号を割り当てます。

D…AからCまでのコードが、OSR リーダー等で正しく読みとられているかどうかのチェックデジット。Xのときもあります。

※ ISBN のつけられる対象資料は、書籍・マイクロ形態・点字出版物・教材用映画やスライドなどで、検定教科書・地図・版画・楽譜・ビラ等の1枚物の印刷物等にはつけられていません。



胡麻総合グランドで部活に励む。この苦労も後もう少しだ。　1997年9月25日撮影。



姿を見せた公認400mトラックと建設中の体育館。附属病院屋上からの景色。来年10月にはその偉容を見せてくれるだろう。　1997年10月9日撮影。

新着東医系図書及び医学系視聴覚資料一覧

（平成９年１月～12月収蔵分）

アレルギーは鍼で治せ！
藤本蓮風著　双葉社　1997.07

絵でみるツボ刺激健康法
芹澤勝助著　健友館　1995.06

急病の鍼灸治療　－いざという時あわてないために－
張仁著　浅野周訳　緑書房　1996.10

局所診断治療学　－反射理論とその実際－
吉元昭治著　エンタプライズ　1996.037

経絡経穴概論　東洋療法学校協会編　教科書執筆小委員会著　医道の日本社　1996.03

黄帝内経稀書集成　第一冊　黄帝内経素問大伝
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1996.12

黄帝内経稀書集成　第二冊　黄帝内経素問大伝中
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1996.12

黄帝内経稀書集成　第三冊　黄帝内経素問大伝下
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1996.12

黄帝内経稀書集成　第四冊　黄帝内経素問講義，黄帝内経素問講義　オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1996.12

黄帝内経稀書集成　第五冊　素問韻語図解，素問明義
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1996.12

黄帝内経稀書集成　第六冊　霊枢三註
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1996.12

古典に学ぶ鍼灸入門　－原典に親しむ－
新村勝資，土屋憲明著　医道の日本社　1997.05

最新鍼灸治療学　下巻　木下晴都著
医道の日本社　1997.04

最新鍼灸治療学　上巻　木下晴都著
医道の日本社　1995.08

症状別パルス刺激針療法の実際
澤津川勝市著　緑書房　1995.09

鍼灸院経営のすべて　出端昭男編著
医道の日本社　1996.10

針灸学　基礎篇
天津中医学院，後藤学園編　兵頭明監訳
東洋学術出版社　1991.05

針灸学　経穴篇
天津中医学院，後藤学園編　兵頭明　監訳
東洋学術出版　1997.10

鍼灸最前線　－科学化の現在と臨床の展開－
丹澤章八，尾崎昭弘監修・編集
医道の日本社　1997.04

鍼灸臨床新治療法の探究　－心に残る診療カルテから－
長野潔著　医道の日本社　1996.09

鍼灸臨床わが三十年の軌跡　－三十万症例を基盤とした東西両医学融合への試み－　長野潔著
医道の日本社　1996.11

スポーツ傷害のハリ療法
－検査・鑑別・治療とそのポイント－
福林　徹，宮本俊和編　医道の日本社　1996.06

図解　鍼灸臨床手技の実際
尾崎昭弘著　医歯薬出版　1996.10

第１回～４回　詳解・国家試験問題集　'97
あん摩マッサージ指圧師・はり師きゅう師用
明治東洋医学院編集委員会編
医道の日本社　1996.12

ツボ治療の決め手　－成人病予防と治療のポイント－
（家庭の医学シリーズ14）
芹沢勝助著　健友館　1994.12

手足の骨膜反射療法　－手穴点圧の秘訣－
陳小雨，陳哲実，陳夷著　東方書店　1997.04

低周波ツボ療法　斉藤隆夫著　鈴木弘文監修
健友館　1995.08

難病の鍼灸治療　張仁著　浅野周訳　緑書房　1996.03

臨床針灸処方の実際　図解
－病名・病症から配穴を導く－
国際中医学研究会編　緑書房　1995.10

臨床実践　鍼灸流儀書集成　第10冊　田中知新流鍼灸秘伝　当流之秘事　鍼灸極秘抄　鍼治秘伝書　鍼灸則　鍼道発秘　鍼術秘要
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1997.04

臨床実践　鍼灸流儀書集成　第11冊　療治之大概集　選鍼三要集　医学節要集　杉山流鍼術　鍼術十箇条　杉山真伝流百法鍼術　針治由来　他
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1997.04

臨床実践　鍼灸流儀書集成　第12冊　九鍼十二原鈔説　鍼灸茗話　灸古義　鍼灸説約　鍼灸知要一言　石坂流鍼治十二条提要　扁鵲伝解　他
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1997.04

臨床実践　鍼灸流儀書集成　第13冊　補註十四経　人身総名　骨経古診脈説
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1997.04

臨床実践　鍼灸流儀書集成　第14冊　煙蘿子針灸法　新刊針灸指南　日用之鍼法　箴法秘要集　秘鍼要語集　鍼灸抜萃大成　鍼灸遡洄集　鍼法弁惑　他
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1997.04

臨床実践　鍼灸流儀書集成　第7冊　五体身分集　耆婆五臓経　五臓六腑之次　第五蔵次第図　五臓六腑形式注文［古解剖図］　五蔵梵字書　五蔵按摩　他
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1997.04
臨床実践　鍼灸流儀書集成　第8冊　五臓註　臓腑部位　陰虚本病・医学正伝抜書　龍珠世宝　針法秘伝抄　意斉流針書　意斉流針秘伝　無分一伝書　他
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1997.04
臨床実践　鍼灸流儀書集成　第9冊　扁鵲真流［岩瀬本］　新撰小銅人略図扁　鵲新流鍼書　扁鵲新流［京大本］　扁鵲新流［杏雨本］　他
オリエント臨床文献研究所監修
オリエント出版社　1997.04
オステオパシー医学手技テクニック　第1巻
S.パリッシュ著　たにぐち書店　1996.12
写真でみる経絡正体法
－経絡線同調動作による異常の診かた－
山根兵太郎著　たにぐち書店　1996.03
手技療法の家庭医学
－カイロプラクティックドクター臨床手記－
安達和俊著　エンタプライズ　1996.04
新・整体医典　山根兵太郎編　たにぐち書店　1995.10
灸に生きた一人の男　自分史　改訂版
亀岡光治著　不動灸　1997.10
整体術教本　井芹茂著　健友館　1993.09
目でみる手技療法の複合テクニック
安達和俊著　エンタプライズ　1997.02

〔視聴覚資料〕
最新医学大辞典　第2版　CD-ROM for Windows
後藤稠等編　医歯薬出版　1997.
目で見る身体のしくみ 10　腎臓と尿路
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 13　運動器
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 14　人体の神秘
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 1　中枢神経
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 2　末梢神経
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 3　感覚器
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 4　呼吸器
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 5　心臓
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 6　血管系とリンパ管系
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 7　血液は語る
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 8　消化管
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
目で見る身体のしくみ 9　肝・胆・膵
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1990.
ヒューマンボディ　CD-ROM for Windows（インターアクティブ人体百科）　松本孝夫日本語版監修
DDPデジタルパブリッシング　1996.
救命救急ワールド　－救命救急：診断と治療のプロトコル－　Macintosh版
大塚敏文監修　メディカル・コア
CD-Atlas 胸部診断　Macintosh版
北村諭監修　南江堂　1997.01
新・整体医典
－日本の伝統（技）を（動き）で解明！！－
山根兵太郎実演指導　たにぐち書店
実践　カイロプラクティック 2
四肢関節のテクニック　大川泰実演指導
たにぐち書店
実践　カイロプラクティック
ディバーシファイドテクニック　大川泰実演指導
たにぐち書店
目で見る病気 10　呼吸器疾患（Ⅰ）
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1991.
目で見る病気 11　呼吸器疾患（Ⅱ）
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1991.
目で見る病気 12　消化管の疾患（Ⅰ）
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.
目で見る病気 13　消化管の疾患（Ⅱ）
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.
目で見る病気 14　肝・胆・膵の疾患
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.
目で見る病気 15　泌尿器の疾患
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.

目で見る病気 16　生殖器の疾患
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.

目で見る病気 17　内分泌疾患と糖尿病
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.

目で見る病気 18　免疫疾患
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.

目で見る病気 19　感染症
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.

目で見る病気 20　血液の病気
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.

目で見る病気 6　血管とリンパ管
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.

目で見る病気 7　病気の原因（Ⅰ）
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1991.

目で見る病気 8　病気の原因（Ⅱ）
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1991.

目で見る病気 9　炎症
医学映像教育センター企画・制作
医学映像教育センター　1992.

眼科学　1
医学映像教育センター企画・制作　中島章原案
医学映像教育センター　1994.

眼科学　2
医学映像教育センター企画・制作　中島章原案
医学映像教育センター　1994.

やさしい栄養学の基礎 Vol. 1　栄養学とは
中田福市監修　医学映像教育センター　1997.

やさしい栄養学の基礎 Vol. 2　エネルギーとなる栄養　中田福市監修　医学映像教育センター　1997.

やさしい栄養学の基礎 Vol. 3　身体を作る栄養
中田福市監修　医学映像教育センター　1997.

やさしい栄養学の基礎 Vol. 4　ライフサイクルと栄養　中田福市監修　医学映像教育センター　1997.

やさしい栄養学の基礎 Vol. 5　病気と栄養
中田福市監修　医学映像教育センター　1997.

やさしい栄養学の基礎 Vol. 6　社会と栄養
中田福市監修　医学映像教育センター　1997.

編集後記

○初代学長河上邦治氏が来校されたのをつかまえて図書館報”駒の館”の名前の由来について一筆お願いした。本号が１７号であるので実に１７年前のことだ。夢幻の如くなり・・・といったところか。○巻頭言は先々号に引き続いて東洋医学教育の立場から矢野鍼灸センター長に健筆をふるってもらった。さて次は誰に頼もうか。○学内ではＬＡＮの工事がすすんでいる。この号が出る頃には完成しているのだろうか？いよいよ図書館も情報化の波に洗われそうだ。頭の痛いことだ。○貸出しの新方式への移行がもう一歩のところで止まっている。まだ数名の人が旧来の方式で借り出したきり返却して頂けない。お願い、なんとかご協力を！！○去年工事中だった鍼灸大前駅も広場が完成した。この号の出る頃にはグランドも完成していることだろう。大学がどんどん変わっていく。